

# 中世英語（1100年～1500年）に見る口語表現<sup>1</sup>

平山直樹

## 0. はじめに

15世紀イギリスの家族の手紙を集めた『パストン家書簡集』の中では、時々現代英語とは少し違う表現に出会う。例えば、(1)に示した現代でも見られる *next* などは、中世では意味が少し異なるので注意が必要である。形が同じである場合、現代英語の感覚では読み間違える可能性があるからだ。また、(2)に示した中世の *by cause* (= *because*) など、現代英語と表記が異なる場合は、複合語やイディオムなどの成り立ちがわかり、英語の歴史を垣間見ることができる。それぞれ『パストン家書簡集』の中でそれらが実際に使われている例を付した。本稿では、このような中世英語において、特に口語表現に着目して文法構造ごとに例を示しながら、それらの特徴の一端を明らかにすることを目的とする。

### (1) *next* の意味

| 中世                                       | 現代      |
|--|---------|
| <i>nigh</i> (= <i>near</i> ) の最上級「最も近くの」 | 「次の、隣の」 |

Wretyn [Written] the Twysday [Tuesday] next be-for [before] Kandylnas

---

<sup>1</sup> 本稿は、2024年度尾道市立大学芸術文化学部日本文学科、第6回「文学談話会」(2024年9月14日開催、於 尾道市役所 2F 多目的スペース 1、2)での発表内容に加筆修正を施したものである。

[Candlemas]. (No. 325, l. 47)<sup>2</sup>

(聖燭節のすぐ前<sup>3</sup>火曜日に記します。)<sup>4</sup>

(2) because の成り立ち

be- (…によって =by) + cause (理由、原因)

Dyuerse [Diverse] men of my freendis [friends] auyse [advise] me to entre [enter] in-to þe maner [manor] of Gresham by force of my writte [writ] of restitution [restitution], whiche I wole [will] not do by cause þe [the] maner [manor] is so decayed. (No. 39, 62-4)

(色々な友人から回復令状の力によって実際に荘園に入って所有を主張するように助言をされたが、その荘園はとても荒廃しているのでそのようにやってもみようとは思いません。)

## 1. 中世英語、および口語について

### 1.1 中世英語（中英語）とは

寺澤（2008: 38）など多くの研究者に支持されている時代区分によると、中世英語とは、大体の目安ではあるが、表1のように古英語の時代の次にあたる1100年頃から1500年頃までの英語のことを言う。

古英語の始まりから中世英語までの流れは次の通りである。紀元前に中央ヨーロッパから渡ってきたインド・ヨーロッパ語族の1つであるケルト族が元々ブリテン島には住んでいたが、紀元5世紀に英語の基となるゲルマン語

<sup>2</sup> テキストからの引用において、現代綴りの補足、および下線等は執筆者による。また、『パストン家書簡集』からの引用の際の括弧内の引用表示は Norman Davis (1971, 1976) 編集のテキストに基づく。以下同様。

<sup>3</sup> 現代英語のように「次の」の意味を表す場合は、「最も近くの」を原義として、後の時間に言及していると考えられる。

Cf. I pray yow send me some secret tydyngys [tidings] of the lyklyod [likelihood] of the world by the next messenger. (No. 338, 53-4)

(世の中の状況についての秘密の知らせを、次の配達人によって私に送ってくださるようお願いします。)

<sup>4</sup> 訳者の表記がない場合、日本語訳は執筆者による。以下同様。

を母語とするアングル人、サクソン人などが侵攻して住みついた。以降 1100 年までが古英語の時代である。その後 1100 年から 1500 年までが中世英語の時代であるが、1066 年にヨーロッパ大陸からノルマン人が侵入してブリテン島を征服するという「ノルマン征服 (Norman Conquest)」が起こったため、ブリテン島の公用語はフランス語となった。「ノルマン征服の結果として、イングランドでフランス語が高い地位に置かれ、それと対照に英語の地位はおとしめられ」(堀田 2016: 4) ていたが、1300 年以降「英語の地位が徐々に回復し、14 世紀後半には英詩の父ジェフリー・チョーサー (Geoffrey Chaucer) が登場するなど、アングロ・サクソン時代以来数世紀ぶりに格調高い英語文学が花咲くことになった」(同書 4)。

表 1 英語の時代区分

|                               |                        |
|-------------------------------|------------------------|
| 古英語 (Old English)             | 449 <sup>5</sup> -1100 |
| 中英語 (Middle English)          | 1100-1500              |
| 初期近代英語 (Early Modern English) | 1500-1700              |
| 近代英語 (Modern English)         | 1700-1900              |
| 現代英語 (Present-Day English)    | 1900-                  |

## 1.2 口語・文語について

口語とは、主に話すときに使う言葉である。それに対して文語は、主に書くときに使う言葉である。英語においては (3) のような語彙の使い分けがある。

<sup>5</sup> 宇賀治 (2000: 17) でも古英語の始まりを 449 年としている。*The Anglo-Saxon Chronicle* (『アングロ・サクソン年代記』) に基づくブリテン島への「アングロ・サクソン人の大挙到来の開始」(同書 23) の年である。また、堀田 (2016: 3) も「449 年が攻略の年」として「この年をもって象徴的に英語史の開始とするのが慣例である」と述べている。

(3) 口語と文語の語彙・フレーズ

|      | <口語 (話しことば)> | <文語 (書きことば)> |
|------|--------------|--------------|
| 延期する | put off      | postpone     |
| しばしば | often        | frequently   |
| 多くの  | a lot of     | many, much   |

(4) に示した Leech and Svartvik (2002) の文法書 *A Communicative Grammar of English Language* によると、Informal language (くだけたことば、口語) は colloquial とも呼ばれ、通常の会話、個人的な手紙、私的なやり取りをする時のことばである。一方、Formal language (形式ばったことば、文語) は、たとえば公的な報告、ビジネスレター、規則、学術的な文章などの内容を表すために使われる書かれた (written) ことばである。本稿においては (4) に従い、くだけたことばを「口語」、形式ばったことばを「文語」と呼ぶ。

(4) 口語と文語の特徴 (※下線は執筆者による。)

- ・ 口語：くだけたことば (informal language)

**Informal** language (also called ‘colloquial’) is the language of ordinary conversation, of personal letters, and of private interaction in general.

(Leech and Svartvik 2002: 30)

- ・ 文語：形式ばったことば (formal language)

**Formal** language is the type of language we use publicly for some serious purpose, for example, in official reports, business letters, regulations, and academic writing. Formal English is nearly always <written>, but exceptionally it is used in <speech>, ….

(同書 30)

(5) に、同じく Leech and Svartvik (2002) から口語表現の代表的なものとして、文語 (formal) では動詞一語であるのに対し、口語 (informal) では同様の意味を易しい単語の組み合わせである<動詞+前置詞>の二語で表してある例を引用した。なお、同書においては文語 (formal) の例が先に出されている。

(5) Formal language (文語)・Informal language (口語) の表現

| <Formal>    | <Informal>  |
|-------------|-------------|
| delete      | cross off   |
| encounter   | come across |
| enter       | go in(to)   |
| investigate | look into   |
| surrender   | give in     |
| renovate    | do up       |

(Leech and Svartvik 2002: 33)

ここで、『オックスフォード英語辞典 (*Oxford English Dictionary (OED)*)』初版の第1巻冒頭にある「一般的な説明(General Explanations)」(1933: xvii)では、当時の英語の専門家は語彙を(6)のように中心となる共通語、それを取り巻く文語と口語、また、その周辺の科学用語、外国語、俗語、専門用語、方言に分類し、それらがどのように関わるかを示していた。ここでは文語(書き言葉)と口語(話し言葉)に関わる記述のみ取り出した。

(6) 『オックスフォード英語辞典』における語彙の種類とその関係

- ・「共通語 (common words)」は「文語用法 (literary usage)」と「口語用法 (colloquial usage)」が交わる中心にある。
- ・「科学用語 (scientific words)」と「外国語 (foreign words)」は「文語 (literature (literary))」を通過して「共通語 (common language)」に入る。
- ・「俗語 (slang)」は「口語用法 (colloquial use)」を通過して「共通語 (common words)」に昇格する。
- ・「専門用語 (technical terms)」や「方言 (dialect)」は、「口語 (speech (colloquial))」と「文語 (literature (literary))」の両方で「共通語 (common language)」に取り入れられる。

(*OED* 1st ed. 1933: xvii に基づく)

## 2. 中世英語の口語表現

### 2.1 使用する中世英語のテキスト

本稿においては、中世英語の実例として、14世紀にチョーサーによって書かれた『カンタベリー物語 (*Canterbury Tales*)』の最初の部分「総序の歌 (*General Prologue*)」と、15世紀イングランドのパストン家の人々によって書かれた手紙を集めた『パストン家書簡集』第1巻、および第2巻から例を挙げて説明する。『カンタベリー物語』は文学であり『パストン家書簡集』は書簡であるためジャンルの違いはあるが、ともに中世英語が使われており、共通する特徴が多く見られるからだ。まず、本稿で例示する際に用いる代表的な刊本テキストを(7)に示す。

#### (7) テキスト

##### ・『カンタベリー物語』:

Benson, Larry D. ed. 1987. *The Riverside Chaucer*. 3rd ed. Oxford: Oxford University Press.

##### ・『パストン家書簡集』:

Davis, Norman. ed. 1971, 1976. *Paston Letters and Papers of the Fifteenth Century* Parts 1 and 2, Oxford: Clarendon Press.

次に、(8)にJucker (2006b) (東泉 訳 2011)による『カンタベリー物語』の概要、(9)に社本 (1999)による『パストン家書簡集』の書き手であるパストン家の概要を示す。また、表2にパストン家の主要メンバーを世代別に示す。

(8) 『カンタベリー物語』とは、カンタベリーにある聖トマス・ベケット廟(びょう)に巡礼に向かう道すがら、巡礼者の中で誰がいちばんためになる話、あるいは面白い話ができるかを競います。様々な身分や職業の人が物語を語ってゆきます。(Jucker 著、東泉訳 2011: 131)

(9) パストン家は、15世紀イングランド、ノーフォーク州の富裕な名家であった。しかし最初は平凡な農夫であり、14世紀の終わりごろはノリッ

ジから約 50 キロ離れたパストンという村に 100 エーカー（約 404686m<sup>2</sup>）の所有地をもち、そこで農耕に励んでいた。農夫であったクレメント・パストンが借金をしながらも息子であるウィリアム・パストン 1 世をロンドンの法学院に送って、そこで法律を学ばせたことが転機となった。ウィリアムは勉学に励んで上級弁護士資格を獲得し、その後国立裁判所判事の職にまで上り詰め、パストンの村でたくさんの土地を購入して手に入れることにより領主権を得た。そして他の土地でも荘園を獲得するなどパストン家の財産を増やし、ついにはジェントリー階級と呼ばれる身分になった。（社本 1999: 29-30（執筆者によるまとめ））

表 2 パストン家の世代別主要メンバー

| 世代     | 名前  |
|--------|---|
| 第 1 世代 | ウィリアム 1 世、アグネス（旧姓：ベリー）  |
| 第 2 世代 | ジョン 1 世、マーガレット（旧姓：モートビー）、エドマンド 1 世、エリザベス、ウィリアム 2 世、クレメント 2 世        |
| 第 3 世代 | ジョン 2 世、ジョン 3 世、マージャリー（旧姓：ブルーズ）、エドマンド 2 世、マージャリー、アン、ウォルター、ウィリアム 3 世 |
| 第 4 世代 | ウィリアム 4 世   |

（※ Davis (1971: xl-lxxiv) に基づく。）

## 2.2 口語表現

口語において、現代英語では発話の最初に Hi などの呼びかけがあるが、『カントベリー物語』では、巡礼者たちが最初に一泊する宿の主人がその人々に呼びかける際の Lordings（紳士淑女の皆様）などがあり、パストン家書簡集では主に書き出しで呼びかける Sir や Mother などがある。その一方で、手紙文である『パストン家書簡集』では手紙特有の非常に堅苦しい呼びかけもある。(10) は『カントベリー物語』の「総序の歌」からの一例である。宿主が巡礼者に旅すがら話をしてもらおうが、そのルールを言う前の呼びかけである。下線を施した呼びかけ“Lordynges”、命令文の動詞“herkneþ”、“taak”があるため話し言葉の特徴を持っている。さらに相手を意識してポライトネス

に立脚した“*I prey yow*”という懇願表現が文の途中で挿入されている点も話しことばの特徴と言える。

- (10) “*Lordynges [Lordings (=Sirs)],*” quod he, “*now herkneth [hark] for the beste; But taak [take] it nought, I prey [pray] yow [you], in desdeyn [disdain].*” (*Prol.* 788-9)<sup>6</sup>

（「紳士淑女の皆様」と主人は言いました。「さあ、よく聞いてください。ですが、お願いですから、このことを決して下らんことなどと思わなくてください。」）（榎井（訳）1995：57-58）

### 3. 実例

口語でよく使われる表現ごとに例を挙げて説明する。3.1では呼びかけ、3.2では命令文、3.3では相手との関係を意識した表現、3.4では *me thinks*、*I guess* など話し手の主観を表す表現、3.5では *truly*、*certainly* など話し手の確信を表す副詞（句）、3.6では動詞を使ったフレーズ（動詞副詞結合（句動詞））、3.7では等位接続詞 *and*、*for* による情報の追加といったそれぞれの表現に着目する。

#### 3.1 呼びかけ

まず『カンタベリー物語』の「総序の歌」より、(11)は登場人物の一人である免罪符売りが歌っている場面である。彼は“*love*（愛しいかたよ）”と呼びかけている。また(12)では、宿屋の主人が“*lordynges*（紳士淑女の皆様）”と呼びかけている。呼びかけが起こる部分はいずれも引用符のついた直接話法になった部分である。次に『パストン家書簡集』より、(13)では息子であるジョン・パストン2世（*John Paston II : JP II*）が母親であるマーガレット・パストン（*Margaret Paston : MP*）に対して、弟のジョン・パストン3世（*John Paston III : JP III*）と戦争に行ったが、二人とも無事に生きていることを伝えている。手紙は書き言葉ではあるが、親しい間柄ではこのような呼び

<sup>6</sup> 以下、『カンタベリー物語』の「総序の歌（*General Prologue*）」からの引用箇所を表示は“*Prol.*”という略号と行数で示す。

かけ (“Moodre [Mother]”) で始まる場合も見られる。

(11) Ful loude [loud] he soong [sang] “Com hider, love, to me!” (*Prol.* 672)

(彼は声高に「あたしの愛しいかたよ、来やしゃんせ、来やしゃんせ」と歌いました。(梶井 51))

(12) And seyde [said] thus: “Now, lordynges, trewely [truly],

Ye been [are] to me right welcome, hertely [heartly]; (*Prol.* 761-2)

(そしてこのように言いました。「さて、紳士淑女の皆様、本当に心から歓迎いたします。」(梶井 55))

(13) Moodre, I recomande [recommend] me to yow, letyng [letting] yow wette [wit] þat [that], blyssed [blessed] be [by] God, my brother John is a lyffe [alive] and farethe [fares] well, and in no perell [peril] off dethe [death]. (No. 261, 1-2 JPII (息子) →MP (母))<sup>7</sup>

(母上に謹んでご挨拶申し上げ、ご報告します。神の祝福にめぐまれて、弟は生きて、元気でいて、死の危険はありません。(三川 (訳) 2001: 287))

### 3.2 命令文

(14) と (15) は「総序の歌」において宿の主人が巡礼の一行に対して話しかける部分である。対面で呼びかけているので、声の調子や表情などを工夫すれば命令文も使える。これは口語の特徴とも言える。(14) では複数の相手に対して “herkneþ” と -eth の付いた複数命令形の動詞が通常通り使われている。一方で “if yow leste” (= if you please) を命令文に付加することで調子を和らげている。(15) では単数の相手に対して “draweþ”、“Cometh”、“studieth” と複数命令形の語尾 -eth が付加され、この心理が単数形に敬語的として転用

---

<sup>7</sup> 以下、口語表現が対人関係に関わることを考慮して、『パストン家書簡集』からの引用には、手紙の送り手と受け手、およびそれらの関係を示した。なお、ここでは JPII : ジョン・パストン2世、MP : マーガレット・パストンとなる。以下同様。

されて敬意が表されている。ただし *ley* は単数命令形となっている。<sup>8</sup> また、『パストン家書簡集』でも (16) のように命令文が使われている。しかし、妻であるマーガレット・パストン (MP) は夫であるジョン・パストン 1 世 (JPI) に対して、相手との関係を考慮して複数命令形 “*Plesyth*” を使って丁寧なお願いをしている。このような文は手紙の始まりの挨拶のすぐ後に良く見られる。

(14) “*Lordynges, herkneth [hark], if yow leste [list (= please)].*” (*Prol.* 828)  
(「紳士淑女の皆様、どうかよくおきき下さい。」(梶井 60))

(15) “*Sire Knyght,*” quod he, “*my mayster and my lord,*  
Now *draweth [draw] cut,* for that is myn accord.  
*Cometh neer,*” quod he, “*my lady Prioressse.*  
And ye, sire Clerk, lat be youre shamefastnesse [shamefacedness],  
Ne *studieth* noght [not]; *ley hond [hand] to,* every man!” (*Prol.* 837-41)  
(「騎士殿、わが主、わが君、籤をお引き下され。まず初めにお願いたします。さあ、さあ、近くへどうぞ。尼僧院長様。それにあなた、学僧殿。ご遠慮なさらぬよう。また、お考え事もなさらぬよう。さあ、皆の衆、引いた、引いた」と宿の主人は言いました。(梶井 60))

(16) *Plesyth* yow to weet [wit] þat [that] I receyvyd [received] a lettyr [letter] on Seynt [Saint] Symondys Evyn [Eve] and Jwd [Jude] þat came frome [from] Jon Paston. (No. 155, 1-2 MP (妻) → JPI (夫))  
(「聖シモンの日の晩と聖ユダの日の晩にジョン・パストンから来た手紙を、私が受け取りましたことをどうぞお知りおきください。)

---

<sup>8</sup> この場面における複数語尾の動詞 *draweth*、*Cometh*、*studieth* と単数語尾の動詞 *ley* の敬意による使い分けについては、市河・松浪 (1934: 164) において、「*Knyght*、*Prioressse*、*Clerk* は *Host* から見て目上であるというわけである。その次の *ley hond to, every man!* では、普通の単数命令形になっている」とある。

### 3.3 相手との関係を意識した表現（確認、お願いなど）

相手との関係を意識した表現として、「総序の歌」より (17) では“ye knowen [know] wel (あなたもご存じの通り)”が使われている。(18) は (10) でも触れたが、“I prey [pray] yow [you] (お願いします)”という懇願表現が挿入されている。最初から計画的に懇願表現“I prey yow”を使って、懇願する内容を接続詞 *that* でつなげて述べたのではなく、話している間に口調を和らげる表現として挿入された、相手との関係を意識した口語的表現であると言える。(19) は『パストン家書簡集』からの引用である。文頭で“I prey yow”が使われて、ややフォーマルと感じられる。しかし、Cfのように“I pray yow”の後に接続詞 *that* が入っていないので、続く部分とのつながりがより希薄であり、口語的特徴を持っていると言える。つまり (19) では、書き手が話を進めている途中で相手との関係を意識したために、“I pray yow”が文頭に置かれたとも考えられる。

(17) And eek (=also) ye knowen wel how that a jay

Kan [Can] clepen [call] “Watte” as wel as kan [can] the pope. (*Prol.* 642-3)

(かけすでも教皇様と同じようにワットとすることができるのは皆様もよくご存じのことでしょう。(梶井 49))

(18) But taak it nought, I prey yow, in desdeyn. (*Prol.* 789)

(ですが、お願いですから、このことを決して下らんことなどと思わんでください。(梶井 57-58))

(19) I prey yow, for your ease and all others to yow ward, plye [ply] thes [these] maters [matters]. (No. 356, 35 JPIII (弟) → JPII (兄))

(あなたの安楽やあなたに対する他のみんなの安楽のために、これらのことを努力されるようお願いします。)

Cf. Also I pray yow that ye [you] woll [will] send me datys and synamun as hastily [hastily] as ye may. (No. 151, 14-5 MP (妻) → JPI (夫))

(また、デーツとシナモンをできる限り早くお送り下さるようお願いし

ます。)

### 3.4 me thinks、I guess など話し手の主観を表す表現

「総序の歌」において、(20)では、続く内容が話し手にとって真実性があると感じられることを表す非人称表現“Me thynketh [thinks]”が使われている。(21)は“I gesse [guess]”が文末で使われて話者の主観性を付け加える例である。それに対してCfでは、“I trowe [trow]”はthatを伴う文語的な使い方になっている。日本語訳でも「～と私は信じます」と名詞節の内容に対して話者が距離を置いており、より文語的であることがわかる。(22)は『パストン家書簡集』からの例であるが、thatは使われずに挿入的になっており、より口語的な表現の例と言える。

(20) But nathelees (= nevertheless), whil [while] I have tyme and space,

Er (= Before) that I ferther [further] in this tale pace (= proceed),

Me thynketh it acordaunt [accordant] to resoun [reason]

To telle yow al the condicioun [condition]

Of ech [each] of hem [them], so as it semed (= seemed to) me,

And whiche they weren [were], and of what degree,

And eek (=also) in what array that they were inne; (*Prol.* 35-41)

(ですが、まだ時間もありませんあいだ、さらにこのお話を進めてゆきま  
すゆえに、皆様にこの人たちのそれぞれの階級を全部、どんな人柄で、  
どんな身分の出で、またどんな服装をしていたか、わたしの目にうつつ  
たままお話しするとよろしいのではないかと思われます。(榊井 14))

(21) Of twenty yeer of age he was, I gesse. (*Prol.* 82)

(年のころは二十歳くらいだったでしょうか。(榊井 17))

Cf. A better preest I trowe that nowher [nowhere] noon [none] ys [is]. (*Prol.* 524)<sup>9</sup>

(この方以上に立派な聖職者はどこにもいないとわたしは信じます。(榊  
井 43))

<sup>9</sup> 行末の“ys”を使った前行との脚韻のために“A better preest”は行頭に移動している。

- (22) Rysyng I trowe hathe [has] be [been] wyth [with] yow. (No. 353, 15-6 JPIII (弟)  
→JPII (兄))  
(リジンは、あなたと一緒にいると私は思います。)

### 3.5 truly、certainly など話し手の確信を表す副詞 (句)

「総序の歌」において (23) は副詞 truly が文頭で文修飾となっている。(24) は certainly の文修飾の例である。(25) は certainly の意味の sickerly である。(26) において一方は “For sothe [sooth]” という副詞句は「確かに」という意味である。もう一方は「事実」の意味の sooth を使った独立不定詞 “sooth to say” が使われている。(27) は “by my trouthe [turth]” という副詞句が使われている例である。同様に『パストン家書簡集』でも (28) のように “by my trowthe” が文末で使われている。このように、「確かに」や「きっと」などを使って、述べられる内容についての話し手の確信が強いことを表す場合はより口語的であると言える。

- (23) For trewely [truly], confort [comfort] ne myrthe (= pleasure) is noon  
To ride by the weye doubt [dumb] as a ston [stone]; (*Prol.* 773-4)  
(だって、ほんとうのところ、石のように黙りこくって行くんじゃ、ちっとも慰めにもなりませんし、面白くありませんや。(榊井 57))
- (24) And certainly he was a good felawe. (*Prol.* 395)  
(たしかに愛すべき好漢でした。(榊井 35))
- (25) And sickerly (= certainly) she was of greet desport [disport],  
And ful plesant, and amyable of port, (*Prol.* 137-8)  
(たしかに非常に楽しそうで、それにとても愉快で、態度も愛らしいところがありました。(榊井 20))
- (26) For sothe he was a worthy man with alle,  
But, sooth to seyn, I noot [ne woot (=do not know)] how men hym calle. (*Prol.* 283-4)

(ほんとうに彼は立派な方と言えました。だが、実をいいますと、わたしは人がこの男をどう呼んでいるのか知らないんです。(梶井 29))

(27) For by my trouthe, if that I shal nat lye [lie],

I saugh [saw] nat this yeer so myrie [merry] a compaignye [company]

Atones (=at the same time) in this herberwe (= inn) as is now (*Prol.* 763-5)

(正直なところ、今年になって、この今のように楽しい一団の方が、真実かけて、旅籠屋にいらっしゃったのを見たことがないのです。(梶井 56))

(28) Now thnk on me, good lord, for jff I haue not an hawke I shall wax fatt for default of labor and ded [deed] for defawlt [default] of company, by my trowthe. (No. 354, 85-7 JPIII (弟) → JP II (兄))

(よき君主よ、今、私のことについて考えてください。というのは、もし私が鷹を持つことがなければ、私の真実にかけて、仲間がいないことによる体を動かす活動の欠如のために、私は太るでしょうから。)

### 3.6 動詞を使ったフレーズ (動詞副詞結合 (句動詞))

「総序の歌」の例では、(29) において “keep” が heed「注意」の意味で使われ、take heed で「注意を払う」(ここでは過去形で took heed) の意味を表す。(30) は動詞 “Hoold [hold]” と副詞 “up” で「上に上げる」という意味を表している。どちらの例も、易しい単語の組み合わせでより口語的である動詞副詞結合 (句動詞) が使われている。また『パストン家書簡集』においては、(31) でより口語的な “go in to [into]” が enter ([場所] に入る) の意味で使われている。これは妻であるマーガレット・パストンが夫であるジョン・パストン 1 世へ、パストン家付の司祭であるジェイムズ・グロイスがパストン家の仇敵と小競り合いをしたことを報告している部分の引用である。この部分は直接話法が使われることもあり、生き生きとした場面描写がなされていることから、口語的な表現が使われやすいと思われる。

(29) Of nyce (= fussy) conscience (= scruples) took he no keep (= heed). (*Prol.* 398)

(彼は繊細な神経などちっとも意に介しませんでした。(梶井 35))

(30) Hoold [Hold] up youre [your] hondes [hands], withouten [without] moore [more] speche [speech]. (*Prol.* 783)

(さあ、つべこべいわずにすぐ手を挙げた、挙げた！(梶井 57))

(31) [A]nd I bad [bade] Gloys go in to my moderis [mother's] place ageyn [again], and so he dede [did]. (No. 129, ll. 23-24 MP (妻) → JPI (夫))

(そして、グロイスにお母様の家に戻るように言い、彼は言われた通りにしました。(三川 (訳) 2001: 73))

### 3.7 等位接続詞 and、for による情報の追加

(32) は「総序の歌」より、等位接続詞の for を使って付加的に理由を加える例である。ここでは、続く法副詞 “trewely [truly]” がさらに口語性の特徴を際立たせている。このような例は (33) のように『パストン家書簡集』でも良く見られる。さらに、(34)、(35) は本書簡集でしばしば見られる口語的な文構造の例である。まず先に一つの文構造を完成させて、その構造を使ってさらに情報を付加している。つまり、主語の “I” に対して、(34) では “Sampson” を、(35) では “Playter” を同様の行為者として後で付加しており、最初から完成した文を考えて書く文語とは特徴を異にしている。

(32) And wel [well] I woot (= know), as ye [you] goon [go] by the weye [way],

Ye shapen [shape] yow (= yourselves) to talen (= tell tales) and to pleye;

For trewely, confort ne myrthe [mirth] is noon

To ride by the weye doub [dumb] as a stoon [stone]; (*Prol.* 771-4)

(わたしは皆様が道すがら話をしたり遊んだりなさる計画だということをよく知っております。だって、ほんとうのところ、石のように黙りこくって行くんじゃ、ちっとも慰めにもなりませんし、面白くもありませんや。(梶井 57))

(33) And thys [this] me thynkyth [thinks] shall do well, for then shall ye mou (=

may) shewe [show] to my lordys [lord's] consayll [counsel] the letter direct (= directed) to yow, (No. 357, 20-1 JPIII (弟) →JPII (兄))

(そして、このことはうまくいくと思われま。というのは、そうすればあなたはあなたに届けられた手紙を私の主人の相談者に見せることができるからです。)

- (34) I prey [pray] yow [you] recomand [recommend] me to mastyr [master] Josephe in my best wyse [way], and Sampson dothe [does] þe [the] same. (No. 358, 41-2 JPIII (弟) →JPII (兄))

(ジョセフ様に私の最も良い方法でよろしくお伝えくださいますよう、よろしく願いいたします。そして Sampson も同じようにして (よろしくお伝えくださいと言って) います。)

- (35) I have be [been] wyth [with] my modyr [mother], and as well as I cowed [could], and Playter bothe [both], we aduertyseid (= informed) hyr [her] to make cheuesance [chevisance] for the c li [100 pounds]. (No. 360, JPIII (弟) →JPII (兄))

(私は私の母と一緒におり、私とプレイターの両方でできる限り、100ポンド借りる契約をするための情報を母に与えています。)

#### 4. まとめ

以上、まず第1節において中世英語を概観し、口語表現について説明した。次に第2節では、本稿で使用する中世英語のテキストとその中で口語表現の一例を示した。その後第3節では、14世紀イングランドの詩人であるチョーサーの『カンタベリー物語』の「総序の歌」、15世紀のパストン家に関する書簡を集めた『パストン家書簡集』から、口語表現の例を文法構造ごとに示した。それらの特徴は次の (a) から (d) のようにまとめられる。

- (a) 『カンタベリー物語』の「総序の歌」においては、引用符のある直接話法の部分で、口語表現で特徴的な「よびかけ」や「命令文」が使われていた。

手紙文という書き言葉である『パストン家書簡集』においても、手紙の書き出しの部分ではこのような対面で使われる口語の特徴が見られた。また、特に命令文においては、どちらのテキストにおいても、相手との関係を考慮して、丁寧な願いをする場合は単数の相手に対して複数命令形を使っていた。

- (b) 相手との関係を意識したポライトネスを踏まえた *I pray you* や相手との心的距離を縮めようとした *you know* などの表現は、文学作品である「総序の歌」で見られた。また、*I pray you* については、手紙文である『パストン家書簡集』でも見られた。この表現が懇願内容を表す節から文法的に遊離した挿入節として用いられる場合は口語性が高いと言えよう。
- (c) 話し手の判断であることを表す *I guess* や *I trow* などの表現、および話し手の確信を表す *truly* や *by my truth* などの副詞（句）が、「総序の歌」と『パストン家書簡集』の両方で見られた。話し手の主観性が高くなるため、口語性が高まっていた。
- (d) 「総序の歌」、『パストン家書簡集』の両方で、最初から文の構成を精緻に考えておくわけではなく、等位接続詞の *and* や *for* を使うことで会話のように話を進めながら付加的に情報を追加していくという、口語性の高い例が見られた。

## テキスト

Benson, Larry D. ed. 1987. *The Riverside Chaucer*. 3rd ed. Oxford: Oxford University Press.

Davis, Norman. ed. 1971, 1976. *Paston Letters and Papers of the Fifteenth Century* Parts 1 and 2, Oxford: Clarendon Press.

## 参考文献

ギース, フランシス・ジョゼフ ギース. 著, 三川基好 訳. 2001. 『中世の家族—パストン家書簡集で読む乱世イギリスの暮らし』 東京: 朝日新聞社. (Gies, Frances and Joseph Gies. 1998. *A Medieval Family: The Pastons*)

*of Fifteenth Century England*. New York: Harpar Collins.)

- 堀田隆一. 2016. 『英語の「なぜ？」に答える はじめての英語史』. 東京；研究社.
- Ichikawa, Sanki and Tamotsu Matsunami. eds. 1997 (1st published 1933). *Chaucer's Canterbury Tales General Prologue* [New Edition]. Tokyo: Kenkyusha.
- ユッカー, アンドレアス H. 著, 東泉裕子. 訳. 2011. 「チョーサーの『カンタベリー物語』における呼称」. 高田博之・椎名美智・小野寺典子. 編著. 『歴史語用論入門—過去のコミュニケーションを復元する』. 東京: 大修館書店, 129-142. (Jucker, Andreas H. 2006b. 'Thou art so loothly and so oold also': The use of *ye* and *thou* in Chaucer's *Canterbury Tales*. *Anglistik* 17 (2): 57-72.)
- Leech, Geoffrey, and Jan Svartvik. 2002. *A communicative grammar of English* Third Edition. Harlow: Pearson Education.
- 榊井迪夫. 訳. 1995 (第1刷: 1971). 岩波文庫 チョーサー作『完訳カンタベリー物語 (上)』(改版). 東京: 岩波書店.
- 社本時子. 1999. 『中世イギリスに生きたパストン家の女性たち—同家書簡集から』. 大阪: 創元社.
- 寺澤盾. 2008. 『英語の歴史—過去から未来への物語』. 東京: 中央公論社.
- 宇賀治正朋. 2000. 『英語史』(現代の英語学シリーズ<第8巻>). 東京: 開拓社.

—ひらやま・なおき 日本文学科教授—